

「想像力と創造力」を豊かにする図画工作の授業についての考察

—絵本制作を通して—

色部 和子

Consideration of developing “imagination and creativity” in art education program
Through the creation of a picture book

Kazuko IROBE

キーワード： 絵本 想像力 創造力 造形表現 「図工 BOOK」

1. はじめに

「図画工作は好きですか」の問に、「図工は苦手です。」「あまり好きではありません。」と半数近くの学生が回答した。その理由は、うまく絵が描けない、イメージがわからない、道具がうまく使えない、汚れる、などさまざまであった。中には、小学生の時に自分の絵を先生に否定されたことで嫌いになったという学生もいる。

図工を苦手とする要因を取り除くことができれば、造形表現に親しみを感じこれまで抱いていた図工への苦手意識を少なくすることは可能であると思う。本授業を通して学生の意識変化を期待したい。小学校図工・美術の指導者を目指す学生には、演習を通して“やってみたら、思っていたより上手くできた。”“絵を描いたり、つくったりするって楽しい。”など表現の喜び、図工の楽しさをぜひ感じてほしいと考える。造形活動の楽しさは、豊かな「想像力」と「創造力」から生まれる。

本稿では、学生が一年間の学習を通して身につけた力や意識の変化などを、『絵本制作』の実践を通して「想像力」と「創造力」をキーワードとして考察していく。

2. 図画工作でつけたい力と教師の役割

(1) 図画工作でつけたい力

図工の時間の教室には、「あっ、いいこと考えた!」、「ここをこうして…」、「ねえ、見て! ほら、こんなのできたよ」、「その色きれい! どうやってつくったの?」…など、生き生きとした声が響き渡り、目を輝かせて夢中で活動する子どもたちの姿がある。子どもたちは、何度も試したりやり直したりしながら、納得のいく形や色を見つけていく。思考・試行（試行錯誤）を繰り返し、思い通りの表現ができたときに得られる達成感、子どもを大きく成長させ自己実現することへの大きな自信となる。

では、造形教育において、表現活動を通して子どもたちにどのような力（資質・能力）をつけていくのか。学習指導要領の教科目標¹⁾には、活動を通して、「感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにする」とともに、「造形的な創造活動の基礎的な能力を培う」とある。造形活動をしているとき、児童は感じる力、考える力、工夫する力などの造形的な資質や能力を発揮し、つくりだす喜びを味わっている。このような観点に立って、教科の目標は、児童自身に本来備わっている資質や能力を一層伸ばし、生活や社会と主体的にかかわる態度を育てることを示している。

(2) 教師の役割

図画工作の時間では、自分の思いや見方、考え方を自分らしく表現することや自分や友達のよさや美しさを見つけ、伝え合うことを大切にしている。

そこで、図画工作における教師の役割について考えてみたい。題材、材料、用具等に関することは当然であるが、子どもの資質や能力を引き出し、さらに伸ばすために心がけたいこととして、子どもの感じ方や考え方を大切に「表現者としての主体性」を尊重しながら、必要に応じた指導・支援をすることであると考えている。このことは、単に図画工作科教育において様々な技術を身につけさせればよいということではなく、「図画工作で子どもにつけたい力とは何か」を考えて授業をするということである。教師には、子ども一人ひとりが本来持っているよさや可能性を十分発揮しながら表現活動ができるような資質・能力を育む授業をデザインする力をつけることが必要である。

3. 授業実践

本授業では、演習を通して材料や用具の扱いや様々な表現技法について学び、技法の習得とともにそれぞれの技法の特徴やよさを感じ取る。学生自身が表現者として「描いたりつくったりする活動を楽しみ、その喜びを味わう」ことの大切さを実感することを目指す。

人は表現活動をするときに、「想像力」を働かせてイメージしたり構想したりし、「創造力」を働かせてそれを形にする。授業のまとめとして、絵本制作に取り組む。絵本の制作は、登場人物及びストーリーの構想、イメージに合う表現方法や技法の選択など「想像力」と「創造力」を十分に発揮しながら行う造形活動である。本稿では、これらの実践が2つの「そうぞう力」（「想像力」と「創造力」）を育むことを具体的な事例を通して考察していく。

1) 授業目標・内容

(1)授業目標

小学校等における造形活動では、子どもたちが日常生活の様々な体験から美しいものや心を動かされるできごと等を感じ取り、感性を働かせながら表現することの喜びを味わうことが重

視されている。

本授業では、材料や用具の体験を通して受講者自身が造形活動を楽しみ表現することの喜びを味わうとともに、そのことを子どもたちに伝える方法を習得することが目標である。

(2)授業内容

目標の実現を目指して、授業内容を以下のよう構成した。

回	授業内容	材料等
1	図画工作科の目標・内容等	
2 ～ 4	描画材料のいろいろ	クレヨン・パス・鉛筆・コンテ・箸ペン・墨汁・水彩絵の具
6 ～ 8	自画像を描く	黄ボール紙・クレパス・ニス・額縁に使う材料
9 ～ 11	立体に表す(粘土)	軽量粘土・土ねんど・液体(リキッド)粘土・粘土板・ヘラ・タオル
12 ～ 18	工作に表す(紙・木)	様々な種類の紙・接着剤・描画材料・糸・紐・その他・木片・板・釘・金槌・電動糸鋸
19 ～ 20	版画に表す	版画用具一式 版の材料
22 ～ 24	モダンテクニック	マーブリング・ローラー・スパッタリング・描画材料・しゃぼん液
25 ～ 29	物語に表す(絵本制作)	絵本制作に必要な材料、用具を各自準備
30	まとめ 「図画工作でつけたい力」	

これらの演習は、小学校図画工作科で指導する造形活動の一部である。材料や用具の体験を通して児童の発達と表現、子どもにつけたい力(学力)など図画工作科が目指すものについて学ぶ。

「物語に表す—絵本制作—」活動は、これまでの造形体験で身につけた様々な技法を活かして本講座のまとめとして取り組む。

「想像力と創造力」を豊かにする図画工作の授業についての考察

「絵本」の教育的効用は、すでに周知されているところである。絵本制作は、登場人物やストーリーを考え、様々な表現方法の中からイメージにあう技法を吟味するなど「想像力と創造力」を発揮して行う活動である。

学生は、毎回の演習で学んだことをスケッチブックに記録し『図工 BOOK』を作成する。活動過程の記録にとどまらず、気づいたことや思ったこと、あるいは指導者としての視点で考えたことなど学びの足跡を残すことは、重要なことである。イラストや写真などを取り入れたり、レイアウトを工夫したりして作成した自分だけのオリジナル記録ノートが『図工 BOOK』である。

この『図工 BOOK』を丁寧に確認することで、学生がどのように「想像力」や「創造力」を発揮して造形活動を行っていたかを読み解くことができると考え、次項から授業実践を分析する。

2) 活動の実際

小学校図画工作科の内容は、A 表現と B 鑑賞の2領域で構成され、さらに、A 表現は「造形遊び」と「絵や立体、工作に表す」からなる。本講座では、演習を通して、表現活動において子どもが発揮する創造的な技能について学ぶ。以下、活動の実際をみていく。

(1) 描画材料のいろいろ

子どもたちは、「お絵かき」が大好きである。低学年の子どもたちにとってもっとも身近な描画材料は、クレヨン・パスである。ほかにも、鉛筆やボールペン、フェルトペンなどの身近な筆記用具、コンテや箸ペン、水彩絵の具など、優れた描画材料は多くある。

本授業では、①クレヨン・パス②鉛筆・コンテ③箸ペンについての演習を行い、それぞれの特徴、表現の違いなどについて学ぶ。

①クレヨン・パス

線描き、こすりのぼし、ぼかし、スクラッチ、バチック（水彩絵の具との併用）ぬり重ね（重色）、混色、など多様な表現ができる。

題材例として〈くだものミックスジュース〉を実践した。自分の好きな形のグラスを描き「ミックスジュースをつくろう」という活動である。パスを使ってミックスジュースを描くことでぬり重ねる必然性につながり、楽しみながらパスの混色が経験できる。同時に、親指を使ってしっかりと混色することや色の混ざりの美しさに気づかせる。時間外課題の「おしゃれな〇〇」に楽しみながら取り組む学生の姿が見られた。この課題は、「おしゃれな」がポイントで「こんな〇〇」があったらいいな、と想像をめぐらし色の組み合わせを考えながら“魔法の親指”で色を混ぜる楽しさを味わうことが狙いである。学生が考えたおしゃれなものは、かさ・ドレス・魚・家・鳥・キリンなどであった。

〈クレパス - ミックスジュース - 〉



〈感想〉大胆に混ぜた方が面白い。白を混ぜると立体感が出る。手が汚れていると終わった時の達成感が大きい。

②鉛筆・コンテ

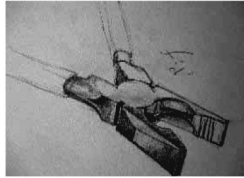
鉛筆、コンテとも「靴」を描く。4Bの鉛筆とこげ茶色のコンテで同じ題材に取り組むことによって、表現の違いに気づきそれぞれの良さを知ることが狙いである。

鉛筆は描画のもっとも基本的な材料であり、国語や算数といったほかの授業において日常的に当たり前のように使用し、なくてはならない筆記用具である。あまりにも身近な材料なので見過ごされがちであるが、鉛筆の芯にもいろいろな硬さがあり、対象や表現のイメージによって使い分けることができ、表現の可能性を広げることができることに気づかせたい。コンテで絵を描いたことがある学生は意外と少なく、実際に経験することにより、「ぼかすと味わいのある表現ができる。」と、優れた描画材料であることを数名の学生が振り返りで述べている。

〈コンテ - 手 - 〉



〈鉛筆 - 道具 - 〉



〈自画像 (デッサン)〉



〈自画像 (油絵風)〉



〈感想〉コンテは軽い描き心地ですらすら描けて面白い。ぼかしを入れると濃淡が出て奥が深い。鉛筆はなじみがあり描きやすい。指でこすりよい感じの影を付けることができた。

〈感想〉デッサンとは全く印象が違う。パスは指で伸ばすと味が出る。色を混ぜると顔の丸味や髪表現に立体感がでる。ニスを塗るとパスで描いたとは思えない質感になった。

③ 箸ペン (割りばしペン)

割りばしをナイフで削ってペンを作る。削り方の工夫で太さの異なるいろいろな線が描けるし、墨のつけ方で濃淡やかすれなど多様な表現ができる。

〈割りばしペン - 靴 - 〉



〈感想〉特有のかすれ具合が気に入った。コンテや割りばしペンは初めてでそれぞれの難しさや使い易さを知った。

(2) 自画像を描く

「自画像を描く」ことの意味を考える。単に、描画の対象ということだけでなく、自分を見つめることが学習の狙いである。子どもたちが、自分の長所・短所・夢など「自分を知る」ことは、これからの生き方やなりたい自分を考えるうえでとても大切なことである。「自画像」は、卒業を控えた6年生に適した題材である。

描画材としてクレパスを使用し仕上げにニスを塗り「油絵」風に表現した。新たな表現方法にふれ、クレヨン・クレパスは低学年のものという固定概念を破り、表現の広がり・可能性を感じることができる。

(3) 立体に表す

立体表現における主な材料として粘土を用いることが多い。粘土は、体全体を使って活動し感性を働かせながら思いを形に表現できる。また、可塑性に優れるため、絵画表現を苦手とする児童にとっては、自由に活動できる素材である。粘土と一口に言っても、油粘土、紙粘土、樹脂粘土、土粘土、液体粘土など様々な種類がある。一般的に粘土といえば「土粘土」を指し、それ以外の粘土を「加工ねんど」と呼ぶ。

授業では樹脂粘土 (軽量粘土)、土ねんど、液体粘土の3種類を扱いそれぞれの特徴を感覚的に体感し題材やねらいに応じて活用できるようにする。樹脂粘土 (軽量粘土) はあまり手を汚さず造形に抵抗感がなく扱いやすい。そのため、低学年では、マグネット、キーホルダー、壁飾り、プレゼントなど活用範囲が広い。土ねんどの良さは、何といっても指で握った時のグニュとした土独特の感触である。五感を刺激し感性を働かせてつくる楽しさを味わうことができる優れた素材である。土ねんどはそのままでは保存ができないため焼成が必要である。液体粘土は、液状であるので絵の具を混ぜて描画材として凹凸の表現ができる。また、様々な材料で造形したものを液体粘土に浸して乾燥させれば、立体作品を制作することができる。大きな紙に手や指で絵を描く活動に子どもたちは夢中になる。低学年でぜひ体験させたい造形活動である。

「想像力と創造力」を豊かにする図画工作の授業についての考察

〈樹脂粘土（軽量粘土）〉

〈土ねんど〉

〈紙工作 - フェニックス - 〉



〈工夫点〉フェニックスが際立つように、月より前方に飛び出すようにした。

〈感想〉

樹脂粘土 手触りがよく触っていて気持ちよかった。あらかじめ針金などで型をつくっておくと立体的に仕上がる。

土ねんど 土鈴をつくって、どんな音が鳴るのかドキドキしたが、焼きあがったらいい音でうれしかった。手でずっといじっていると手の熱で乾燥してしまう。

液体粘土 触ったら冷たくてトロトロしていた。ヨーグルトみたいだ。直接手につけて絵を描いたら、立体的な絵が描けた。凸凹しておもしろい。初めての感触でこの技法好きだと思った。大きな紙に大胆に描きたいと思った。共同作品をつくるのも楽しそう。

〈紙工作 - わたしたちのまち - 〉



〈感想〉「紙」は、描いて、切って、貼って自由自在である。立たせる工夫をした。

〈紙工作 - 幸せを運ぶカード - 〉



〈工夫点〉誰に、いつ、どこであげようかを考えながら思いを込めて作りました。このカードにはもらった人が幸せになれるとその笑顔にあげた人も幸せになれるという意味を込めました。

(4)工作に表す

「工作に表す」学習は手や道具を使ってものをつくりだす活動である。材料も様々である。本授業では、主な材料として「紙」と「木」を扱う。

工作の学習においては、構想カードに、何をつくるか（テーマ）、何でつくるか（材料・道具）、どのようにつくるか（方法）を考え、イメージスケッチをする。目的や用途を意識することも重要である。例えば、お母さんへ感謝の気持ちを伝えるメッセージカードをつくる場合、対象はお母さんでお母さんの好きなものや伝えたい事柄などを具体的にイメージできる。より感謝のお気持ちが伝わるように、色や形だけでなくポップアップなど仕掛けの工夫をする。

材料の接着、切断する場合、材料に応じた接着剤や道具が必要である。用具・道具の正しい使い方のみならず安全に使用することも指導上の留意点である。特に、鋸や金槌、ナイフ等の扱いには十分な配慮が必要である。

〈木工作〉

- ブックエンド「宇宙」-



〈感想〉木を切ったり彫ったりが久しぶりで少し不安だった。鋸や彫刻刀の使い方は安全に配慮して、丁寧に指導しなければならないと思った。

〈紙版画 - 北風と太陽 - 〉



〈感想〉絵の具で描く絵とは違って、カスレやにじみが味になる。

版画は少しあったかい感じがする。

〈感想〉簡単に何枚も刷れるので、絵本づくりの背景などに使いたい。

〈木工作 - 立方体が座る椅子 - 〉



〈感想〉きっちり採寸しても鋸で切る過程ですれが生じ完成予想図と違ってしまったりする。失敗は悪いことではない。そこから新しい発想が浮かぶこともある。

〈感想〉作品の完成後に行う発表会も友達作品を見て刺激になったり、想像力が豊かになったりするだろうと思った。目的や用途を初めから決めていた人、途中で変えた人。みんな作品として完成していてすごいなあと感じた。

(5)版に表す

「版に表す」とは、身近な材料で版をつくり同じものを何枚も写し取る造形活動である。

低学年の「版遊び」では、凸凹を見つけてこすったり、身近なものでスタンプしたり、ローラーに絵の具を付けて転がしたりなど、遊びの要素を取り入れ、写し出された形や色を楽しみながら体全体を使って活動する子どもたちの姿が見られる。

この活動は、中学年以降の「版に表す」活動に発展する。子どもたちは、「主題」に沿って下絵、版づくり、刷りのプロセスで試行錯誤を繰り返しながら表現を持続させていく。モダンテクニックで扱うマーブリングやスタンプング、デカルコマニー、フロッターージュ、スパッタリングなども「版にあらわす」の技法である。

(6)モダンテクニック

モダンテクニックとは、様々な方法で偶然にできる形や色の効果や表現のことである。小学校では、身のまわりにあるストローや歯ブラシ、ビー玉、段ボールなどを使って、写し取ったり、ぼかしたり、こすりだしたり、削ったりなど、いろいろな技法を試して自分だけのいろがみをつくる。偶然性からできた色や形の世界にイメージを膨らませ、思いついた主人公・登場人物をもとに、発想を広げて絵本制作につなげる。モダンテクニックの種類は様々なが、本授業では以下の活動を行った。なお、技法の説明は省く。

技法	感想
マーブリング	マーブリング液は水によく広がりが、写し取るとききれいに色がついた。模様が面白かった。種類を増やすと面白いけど、混ぜ過ぎると思うような色にならない。
バチック	色のはじかれて模様がきれいになりました。とても鮮やかです。絵の具をはじいてできる独特な色合いを想像しながら描いていくと表現の幅が広がると思いました。
スタンプング	身近なものでペタペタして楽しかった。同じ材料でも色や角度を変えて押すと形が変わって面白い。
デカルコマニー	好きな色を紙にのせて折って開いてみると芸術的な思いがけない形ができうれしかった。開く前にどんな形になるか予想し合うのも楽しい。

「想像力と創造力」を豊かにする図画工作の授業についての考察

フロッターージュ	ある程度凸凹がないと写し取りづらい。こすり加減によって雰囲気が変わる。繰り返し使って連続模様をつくるのも楽しそう。
ドリップング 吹き流し	思うように散らなかったり、色が混ざったりしたが、予期せぬところに軌跡ができて面白い。
スパッターリング	思うように色が出ず難しかったけど水加減を調整していくうちにいい感じになった。絵の具の量やこすり具合によって色の出方が変わる。ブラシを指ではじいても面白いと思った。

モダンテクニックの活用 - 主人公をつくらう -



〈感想〉リアルな鳥にとらわれず、自由な発想で色や模様を描いた。羽のふわふわ感を出したくて白を混ぜてみた。いい感じ。

〈感想〉ここでつくったキャラクターをもとに、絵本のストーリーを考えるのは楽しい。背景なども工夫したい。

〈感想〉個人活動もよいが、グループで大きな紙に様々な技法で絵を描くのもいいな。友だちの絵につけ足したり発展させたりなど表現のはばが広がると思う。

3) 物語に表す

- 絵本制作の実践 -

「物語に表す」は、本授業のまとめの演習である。学生は、これまでに表現者として感じたことや理解したこと、気づいたこと、考えたこと、指導者として学んだことなどをその都度『図工 BOOK』に整理し、記録してきた。様々な表現技法を効果的に活用して、構想→制作→鑑賞会のプロセスで絵本（紙芝居も可）制作に取り組む。


「絵本制作」は、これまでの造形活動で培った力を発揮しながら取り組む、1年間の集大成の活動である。ポイントは、表現したい主題のイメージに合うような技法を選択し、活用することである。登場人物、ストーリー、主題など「想像力」を働かせて「物語」を起承転結で構想し、ラフスケッチに表したり文章化したりすることで、漠然としたイメージを徐々に明確な形にしていく。さらに、いろいろな技法を試し、納得いくまで試行錯誤を繰り返しながら思いを形にしていく。図画工作では、このような感性を働かせながら自分のもてる力を最大限発揮して造形活動に向き合う姿やその過程をととても大切に

する。絵本制作の活動は本稿の中心テーマであるので、次項において具体事例を提示し、「想像力と創造力」を発揮しながら造形活動に取り組む姿を考察する。絵本完成後に行う鑑賞会は、友だちの良さを認め合う機会としても意義ある活動である。

本項では、「絵本制作」の具体事例から「想像力と創造力」を働かせて、つくる喜びを味わっている姿を捉えていきたい。制作を終えての感想、友だちからのメッセージなどを分析することにより本題材の価値の有効性を読み取ることができると考える。

具体事例の分析において、題名、主題、技法及び描画材料、ストーリーなどから発想や構想の力を、完成後の感想や工夫したことなどから創造力を読み取る。「友達から」のコメントは、「絵本鑑賞会」を行った際の感想である。発表する側も見る・聴く側もそれぞれの工夫を感じ取り、良さを認め合う雰囲気があった。

(1) 事例1

題名	にじいろちようちよう
主題	鞆の中の思いでは？(勇気)
描画材技法	絵の具・クレヨン・色鉛筆・ローラー パチック・貼り絵・フロッタージュ
ストーリー	大きくて重そうな鞆を持った主人公が、熊やうさぎに出会い鞆の中身は何かと聞かれる。主人公は、これには暗くて怖いものが入っているから開けられないという。3人目のねこが、むりやり鞆を開けてしまう。そこには虹色の蝶が入っていた。鞆にもつときれいなものを詰めようと旅に出る。
表紙ラフスケッチ	
感想・工夫点	登場人物を考えるのが楽しく、お話の中で生き生きと動いてくれるといいなと思いながら描いた。基本は絵の具で着色し、その他にクレヨンを使ってパチック、版画で独特な柔らかなさのある色合いを表現した。いろいろな技法を使って見て楽しい絵本にしようと心掛けた。主人公が毎ページに登場するので、同一人物に見えるよう絵柄を変えないことや、赤いマフラーを付けて統一感が出るように気を付けた。
友達から	<ul style="list-style-type: none"> ・イラストがきれいで希望が持てるストーリー。 ・絵がカラフルできれいで、暖かくほっこりする。 ・水彩絵の具のタッチが素敵。物語もほっとするお話ですね。 ・絵がきれいで引き込まれました。お話も素敵で小学生に読ませたいと思える作品です。 ・絵が暖かくほっこりする。物語も友情勇気が表現されていてよかった。 ・絵がカラフルでとつてもきれいな。美しい思い出を「ちようちよう」で表現するのが素敵だなと思いました。 ・タイトルが1番の秘密になっていて工夫されていると思いました。 ・版画、クレヨン、絵の具と多くの技法を使っているのが驚いた。 ・水彩絵の具のタッチが素敵です。物語もほっとするお話でまた読みたいですね。

事例1の考察

友達からの感想にもみられるように、仕上がりが非常に美しい。版画・パチック・貼り絵・フロッタージュの技法を効果的に使い、さらに水彩絵の具・クレヨン・色鉛筆の描画材で透明感のある色調にまとめられた完成度の高い作品である。


『図工BOOK』の構想のページには、登場人物やストーリーがイラストできめ細かに描かれている。想像がどんどん膨らんでいく様子が読み取れる。さらに、想像力を働かせてストーリーを展開し、それぞれの場面に応じて技法を選択している。技法の扱いも緻密な作業で効果的である。

本学生は、どの活動にも意欲的に取り組み様々な技法を確実に習得してきた。その力に支えられ豊かな創作絵本を完成させている。

(2) 事例2

題名	がんバツタ (紙芝居)
主題	あきらめないで頑張ること
描画材技法	色鉛筆・クレヨン・水彩絵の具 版画・スパッタリング・マーブリング
ストーリー	ある町に「いきあたりばったり」という名前のバツタがいました。気ままに生きていたバツタは、ある日、体のシミに気づき病院に行きます。これは「苦シミ」「悲シミ」というシミで果物を食べると治るとお医者さんに言われ、果物探しの旅に出ます。せっかく見つけた柿は「もがき」「あがき」という食べられない柿。次に、何度もくじけそうになりながら「命がけ」という崖を登り頂上にたどり着きます。目の前に素晴らしい景色が広がり、不思議なことに体の「シミ」が消え、その時からバツタの名前は「がんばった」になりました。
感想・工夫点	私は、子ども達に「頑張る」ってこういうことだよと伝えたくてこの物語を考えました。主人公のバツタが目立つように、版画で表し、きれいな背景を描くために絵の具の色づくりを工夫しました。自分のアイディアの詰まったこの紙芝居を一生大切にしたいと思います。

「想像力と創造力」を豊かにする図画工作の授業についての考察


あるシーン	 <p>やっと、見つけた柿は「もがき」「あがき」という「柿」で残念ながら食べられない。</p>
友達から	<ul style="list-style-type: none"> ・ネーミングセンスと発想がすごい。バツタの版画が効果的で独特の柔らかな色合いで素敵です。 ・言葉遊びの中にメッセージが詰まっています素晴らしい紙芝居でした。 ・背景がきれいで、絵にもお話にも色々な工夫があって、次を予測して楽しめました。

事例2の考察

「いきあたりばったり」「苦シミ」「悲シミ」「もがき（柿）」「あがき（柿）」「命がけ（崖）」「がんばった（バツタ）」など、ひねりの効いた言葉遊びが楽しく、発想がよい。主人公のバツタにも全力を注いで表現している。本学生は、授業を終えての振り返りの中で「この図工BOOKにはたくさんの思いが詰まっている。……自分なりに一生懸命やることが図工の楽しさであり、一番大切なこと」と、図工で大切にしていることに触れている。紙芝居の制作にあたり、「想像力と創造力」を存分に発揮して活動したことがうかがえる。

(3) 事例3


題名	ある日アヒル（紙芝居）
主題	自分の居場所探し
描画材技法	色鉛筆・クレヨン・絵の具 スパッタリング・マブリング
ストーリー	いつもベンチでゆっくりしているアヒルが、カエルやアメンボの真似をするがうまくできない。あきらめて寝ていると車に出会い、ゆったりできていつもと違うよいところを見つける話。
感想・工夫点	実際に子どもに読んであげたら、いろいろな動物に興味をもって来て、楽しみながら読み聞かせができました。作ってよかったと実感しました。描画材を使い分け、学んだ技法を活用しました。

あるシーン	
友達から	<ul style="list-style-type: none"> ・水彩絵の具や色鉛筆を使って背景を描きページ毎に塗り方を工夫している。 ・アヒルがかわいらしくて私もあの車に乗りたいと思いました。 ・色々なことに興味を持って挑戦してみることが描かれているなどと思った。 ・紙芝居は文字がなく、聞いている子の想像力が育てられてよいなと思いました。

事例3の考察

出来上がった紙芝居をさっそく子どもたちに読んで聞かせるという行動は、作品の仕上がりに自信を持ったからこそといえる。本人が感想で述べているように、図工に対する印象が大きく変容したことがわかる。実際、図工BOOKを見てみると、授業の回を重ねるごとに表現に自由さが表れている。実際に、活動しているときも生き生きとした表情が見られた。造形活動を通して、表現することの楽しさ、喜びをより味わうことができたことがわかる。

(4) 事例4

題名	もぐらくんの春
主題	もぐらくんとみみずさんの友情
描画材技法	絵の具・クレヨン・ローラー 水彩・マブリング・パチック・版画
ストーリー	幼い頃に両親が食料を探しに行ったきり戻ってこないため、もぐらは一人ぼっちで住んでいて、地上に出ることを恐れている。物知りのみみずさんは、もぐらにいろんなことを教えてくれる。もぐらに何とか外の世界に行ってほしいと思っている。
表紙・登場人物紹介	

感想・工夫点	初めて絵本作りをしてみて、キャラクターやストーリーを考えるのがすごく大変で悩みました。私のように絵があまり得意ではないと思っている児童に、授業の中で支援をしていくことが大切だと感じました。「うまくなくてもいいからやってみよう」と声かけしていきたいと思いました。
友達から	<ul style="list-style-type: none"> イラストもストーリーも興味がわいて想像を掻き立てられ、どんどん読み進めたい本です。 背景をあえて多く塗らないで伝えたいシーンだけが描かれているので、想像するワクワク感あります。 セリフの背景にマーブリングの模様がきれいで効果的だなと思いました。

事例4の考察


「もともと図工が好き」という学生なので豊かな感性が作品の随所にみられる。全体としては、水彩の透明感のある作品にまとめているが、マーブリング、バチック、版画の技法も効果的である。

造形活動を楽しみ、教師としての視点で様々な児童に寄り添うことの大切さにも考えが至っている。「…想像を掻き立てられ…」「…想像するワクワク感…」の友だちからのコメントは、構成力、表現力のすばらしさが伝わったメッセージであると言える。

これまでに培ってきた資質・能力を存分に発揮しながら造形表現を楽しんで活動している本学生は、さらに「想像力と創造力」を更新していると言える。

(5) 事例5

題名	マーレちゃんのおかいもの
主題	おしゃれの好きな女の子が買い物に行くときのわくわくした気持ち
描画材技法	スパッタリング・シール・鏡（銀紙） クローゼット（開く仕掛け）
ストーリー	おしゃれが大好きなマーレちゃんは、クローゼットを開いてたくさんのお洋服の中からお花のワンピースを選び鏡の前でお化粧をして、パパとママとお買い物に出かけます。 マーレちゃんは、どんなものを買うのかな。

表紙・仕掛けの工夫	 <div>クローゼットの工夫</div>
感想・工夫点	白い画用紙全体にスパッタリングで色を付けた。鏡はアルミホイルを使って鏡っぽい感じを出したり、クローゼットはただ描くだけでなく開くような仕掛けを工夫したりした。反省点は、ストーリーが浅くメッセージ性がないものになってしまった。
友達から	<ul style="list-style-type: none"> スパッタリングの色合いがすごくかわいい。女の子が好きそうな要素がたくさん詰まっている。 自分が好きなことを絵本にまとめていてよいと思います。 クローゼットが開く仕掛けや、私では思いつかないようなアルミホイルを使うなど工夫がされている。 おしゃれアイテムがかわいいので何回も見たいくらいそう。

事例5の考察

ストーリーを考えるときに、主人公や登場人物に比較的親しみのある“動物”を扱う学生が多い中で、本学生は、等身大の自分に近い人物を登場させている。とびだす仕掛けなど様々な技法を使い、表現に工夫が見られる。本人は、反省点としてストーリーが浅くメッセージ性がない作品になってしまったと述べているように、テーマ性は弱い。原因の一つに言語表現が考えられる。「絵本」であるが、言語によるメッセージも重要な要素である。

しかしながら、本授業において大事なことは、結果よりも、制作過程でどう活動したかである。本学生は、どんどんアイデアを思いつき（想像する）、「こうしよう、ああしよう」と工夫を凝らして主体的に生き生きと創造することを楽しんでいた。

「想像力と創造力」を豊かにする図画工作の授業についての考察

4. まとめ

－感想「図画工作を学んで」から－

授業を終えて『図工 BOOK』をめくれば一年間の学びの足跡を辿ることができる。「図画工作を学んで」の感想に目を通すと、学生の図工に対する印象の変化等を読み取ることができる。

事例 1

私は絵があまり上手でなく苦手な方なので図工はあまり好きではありませんでした。でも、久しぶりに描いて楽しいなと思いました。大事なのは、上手に描いたりつくったりということではなく、楽しくその人だけの作品をつくることだと気づきました。とても楽しく図工の授業に取り組むことができました。実際に自分が描いたり作ったりすることで、難しいことや楽しいことが分かったので、子どもに図工を楽しいと思ってもらえるような授業をすることが大事ということを学ぶことができました。

事例 2

初めは絵が下手なので不安だった。やっていくうちにとても楽しくなって「こうしたい」「もっとやりたい」と思うことが多くなっていった。子どもたちの中にも絵が苦手だったり、製作のアイデアが出てこない子がいたりするだろう。そんな子どもたちが図工を嫌にならないような授業をつくっていききたい。私自身が楽しいと思えたら子どもたちにも伝えていけると思う。実際に、誕生日の友達にバースデーカードをつくったり、布を使って飾りつけをしたり、絵やイラストを描いてみたりと生活の中で図工に触れることが多くなったと感じる。今まで触れてこなかった図工に触れるようになって、とても新鮮でわくわく！！そして、友だちに喜んでももらえたり、「すごーい」と言ってもらえたりすると、とてもうれしい。苦手だった図工でうれしい気持ちになるなんて思ってもみなかったから、もっと興味がわいた。もっともっとたくさんの技術を身につけて、子どもたちと一緒にさらに学んでいききたいと思う。

事例 3

私は今までの作品作りで「恥ずかしくないように」「失敗しないように」ということを考えて、あまり冒険しなかったように思う。だ

が、新しい技法を試したり、今までやってきたことにもう一工夫加えてみたりすることで「この模様が〇〇に見える」とか「こうやってみたら、いい感じになった」など、新しい発見があって、そこからアイディアが生まれてくる。そこが図画工作の楽しいところであると思う。私が将来児童に教えるときに「図画工作に正解はない。人それぞれによさがあって、世界に一つだけの作品をつくっている。」ということを教えたい。鑑賞するときには、児童同士で質問し合ったり評価し合ったりすることでコミュニケーションの輪も広げたい。

事例 4

私はもともと絵を描いたりすることが好きだったので、何かをつくるのがとてもワクワクする時間でした。この1年間は、児童だけではなく教師としての新しい視点で図工の授業を考えることができました。児童には、自由な発想でいろいろ挑戦してほしい！と思います。クラスには様々な児童がいます。図工が得意な子、不得意な子、それぞれの声を聞き、時にはヒントを出してあげることも重要です。教師自身の考えに偏ることなく児童をよく理解して柔軟な指導をしていくこと、教師自身が図工を楽しみ多様な考え方を受け入れようとすること、が大切だと思いました。

事例 5

図画工作で様々な描画材や表現方法を学んできました。描画材はそれぞれ色合いや質感に特徴的な違いがあり、描き方によっても異なってきます。また、色の違いと作り方を知ること、自分の出したい色を見つけることもできます。混色という方法を知ること、色にさらに深みを出すこともできます。では、これらを学んでどう教育につなげるか。図画工作とは、自分の心の表現を目に見えるようにする術であり、学ぶ教科だと思いました。絵が上手、下手ではな

くその子の思う、表現したいものを表すため、さまざまな技法を学び、駆使できるよう手伝う教科なのだと思います。その子の価値観や美的センスを納得いくように表現してもらいたいです。

考察

図工を苦手と思っていた学生の意識の変化は大きい。事例1, 2は、図工が苦手であり好きではなかったという学生であるが、図工の授業で描いたりつくったりなどの表現活動をしていくうちに、だんだん「楽しくなってきた、もっとやりたい」と思うようになり図工に対する意識が変わってきた。特に、事例2の学生は、苦手だった図工でうれしい気持ちになった自分に感動し、子どもたちにも図工の楽しさを伝えたいと記している。さらに、一年間「図画工作」を学んだことで「上手に描いたり、つくったり」することよりも「一生懸命取り組むこと」や「表現する喜びを感じ、楽しさを味わうこと」がより大事なことであるということを実感している。このことは、図工という教科が大切にしている「想像力と創造力」を働かせて自分らしく豊かに表現することに通ずるものである。

3、4、5の事例に「図画工作に正解はない。「世界に一つだけの作品をつくらせてほしい」、「自由な発想でいろいろなことに挑戦してほしい」などと子どもたちにメッセージを贈り、「図工とは自分の心の表現を目に見えるようにする術であり、学ぶ教科」であるという教科の本質を示唆している。

図画工作とは、楽しさを軸に感性や想像する力を羽ばたかせ、材料や用具とかかわりながら、もてる資質・能力を十分発揮して「思い」を形や色で創造的に表す造形活動である、といえる。

本年(平成29年)学習指導要領²⁾の改訂が行われた。社会の変化に応じてほぼ10年ごとに改訂が行われるが、時代は変わっても指導要領に示される図画工作・美術教育の目指すものは大きくは変わらない。図画工作・美術教育に携わる指導者には、指導要領に示された教科目標を踏まえて、教師自身が「つくること、描くこと、みること」などの表現することを楽しめ

る感性が求められる。

今後とも、教師自身が表現者であるために「想像力と創造力」を豊かにするカリキュラムの在り方について検証していきたい。

注

1) 平成20年改訂小学校学習指導要領

教科の目標について、「児童自身に本来備わっている資質や能力を一層伸ばし、児童が自らつくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、生活や社会と主体的にかかわる態度を育て、豊かな情操を養う観点に立っている。」と示している。

2) 平成29年改訂小学校学習指導要領

教科の目標について、「児童自身に本来備わっている資質や能力を一層伸ばし、表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かにかわる資質・能力を育成することを目指す観点に立っている。」と示している。